

「元謐墓誌銘」



「元謐墓誌銘」



「元謐墓誌銘」



「元謐墓誌銘」



「元謐墓誌銘」



「元謐墓誌銘」



「鄭羲下碑」



「鄭羲下碑」



「鄭羲下碑」



「鄭羲下碑」



「鄭羲下碑」



「鄭羲下碑」



「書の古典観照」⑥

「六朝楷書」・③鄭道昭

『元謐墓誌銘』



『元謐墓誌銘』



『元謐墓誌銘』



『鄭羲下碑』



『元謐墓誌銘』



『元謐墓誌銘』

今回は、鄭道昭と書風が大変似た、鄭道昭とほぼ同時代の『元謐墓誌銘』(図版)を紹介しよう。この墓誌は、北魏の正光五年(524)の刻であり、鄭道昭の『鄭羲下碑』は永平4年(511)であり、ほぼ10年後である。同じ北魏の同時代の書と見ることが出来る。墓誌銘はその用途から制作されてすぐに墓室に納められ、出土したのは1990年であり、長い間制作された当時のままに100年余り墓室の中安置されていた。ほぼ完全であり、当時のままの刻石状態を見ることが出来る。一方、鄭道昭の摩崖刻石は、制作された時から今まで野外の自然の中で1400年余りの間、風雪に耐えてきた。ま

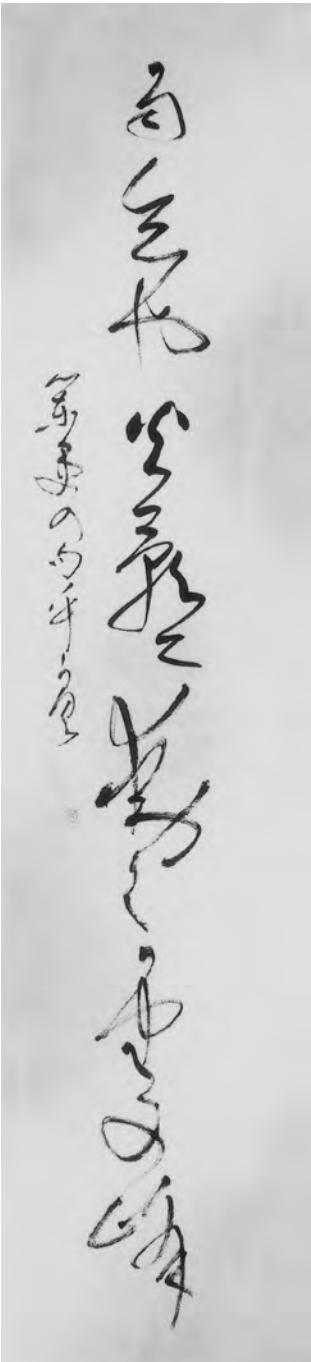
た『元謐墓誌銘』は文字が大きく、鄭道昭の下碑に近い。両者の共通の文字を取り出して比較した。共に字画が鮮明な「陽」「道」の「子」の三字は、起筆、送筆、終筆、それに文字の点画構成も似ている。その他の文字も筆勢や構成も共通の書風を示している。鄭道昭の本来の趣は、元謐墓誌銘に近いものではなかろうか。『元謐墓誌銘』の「道」「子」二字は、拓本字画であるが、白と黒を反転した。すると毛筆で書かれたような趣になる。

伊藤滋（書斎名・木鶲室）

書道芸術院

平成の群像 (2018)

第70回毎日書道展



田子白嶺書

「父と師の言葉」



田子白嶺

現在、私は下谷先生に師事してかなを学んでおります。かつては山本聿水先生に師事し、各書展で前衛書部に在籍しております。30年ほど前、毎日展で会員賞を受賞しました。当然師の御指導や会の皆様のお陰ですが、この時の感激は今も忘れません。

受賞した事を実家の父に報告に行きましたが、写真に撮った私の作品に対する父の評価は最悪でした。私の実家は寺で父は住職、仏教の他に広く学問を好み、また職業柄毛筆で字を書く事も多く、書の勉強もかなりしていたと聞いていましたが、私は書に關してだけは父を越えたと思っていました。

しかし、父が私に言った事は「書は人なり、人格をも表わすと言うが、ここにあるものは人間性や人格などとは程遠い。このようすに奇を衒い、得意そうに見せびらかそうとするから品位を欠く、見るに足らん」と。他にも色々と言われたのですが、ただ芸術的な書を否定しているのではなく、表われている私を「未熟」として否定的だったと思います。

私は山本先生に父に言られた事を全てを聞いていたきました。先生は「君は今まで良い。何を言わても気にしてないようだ」と宥めるように言われました。また「君もいつか父の言われた事がわかる時がくる」と言われましたが、先生は、父に限りしてだけは父を越えたと思っていました。

今は「昔父が言いたかった事も、この事なのではと今は素直に思います。

ご存知の様子でした。

私が山本先生から学んだ事は多々あります。特に学び方、学ぶ態度で、それは「謙虚」だと思っています。「自分以外は皆師と思いなさい、注意すれば子供から学ぶ事もある」また、「真に学びたいものは、師を頼つてコップの水は空にせよ、水を充満したコップに新たな水を注げない、あふれるだけ」また、「真に学びたいものは、師を頼つて教えてくれるのを待つのではなく、自からつかみとること」等々。

下谷先生もまた書を通して、学ぶ人生の師であり、同じ意味のことを申されます。

特に「健康に留意して、考え方工夫してより多く書きなさい」「素直に」と、書については私の力量に応じて一步ずつ前進できるように指導して下さるのですが、私自身足踏みする事が多く、今さらながら書のむずかしさを感じます。先生は「むづかしいからこそ面白い」今の私にはあまり実感がありませんが、書はともかく、人として謙虚でありたいと思います。

今は「昔父が言いたかった事も、この事なのではと今は素直に思います。

書のひろば

理事長 辻 元 大雲

毎日書道展70年史座談会開催

毎日書道展は本年70回展の節目を迎え、各種記念事業が展開されている。既に功労者表彰、企画展示「墨魂の昂」が終了し、現在全国巡回展が順次開催されている。

「毎日書道展70年史(仮称)」は「60年史」を基としてその後の10年間の活動記録を現在まとめ中で、60回展までの記録はDVDに収録し、その後の10年間の記録、70回展の記念事業などを編集して作成予定である。

9月18日、70年史の中心となる「毎日書道展70年を振り返り、将来に向けて」をテーマに座談会が開催された。

・実行委員 中原志軒、加藤有鄰
・座談会出席者 西村修一専務理事、辻元大雲、室井玄聰、下谷洋子、赤平泰処ほか8名。
・内容 ①70年を振り返り ②各部門での変遷 ③海外展 ④特別企画展示 ⑤審査システムなど ⑥U23制度 ⑦今後への展望

今後編集作業を進め来年3月発行予定。ご支援をよろしくお願いしたい。

書道芸術院秋季展開催へ

10月2日～7日まで、セントラルミュージアム銀座およびアートサロン毎日2会場にて開催される。

セントラル会場では財団役員、審査会員選抜作家、審査会員候補公募入賞作品合わせて150名余の出品作品。アートサロン毎日では今回より新しい企画「書道芸術院の漢字」展(来年以降は部門を変えて開催)が17名の院中堅作家の意欲的な作品が展示される。(詳細次号報告)

・会期中の主な行事

10月6日	13：30～15：30	表彰式、作品研究会(3階会議室)
17：00	祝賀懇親会(2階ホール)	
10月7日	10：00～12：30	「書道芸術院の書・漢字」研究会(アートサロン毎日)

第68回玄遠社書展 併催恩地春洋遺作展開催

9月12日～17日まで大阪市立美術館にて開催され、会期中16日、表彰式および祝賀懇親会が天王寺都ホテルにて盛大に開催された。

会場には恩地春洋先生の代表的な遺作が周りの壁面に展開され、中央の壁面に会の役員作品が先生の作品に見守られる如く展示されていた。久しぶりに先生にお会いできたような感慨を受けた。小林琴水会長、小伏竹村顧問は

じめ会の皆様のご苦労、ご努力に敬服。



玄遠社書展会場風景

墨宣会創立60周年記念展開催

9月11日～17日 昌寶学園まえばしホール(旧前橋市民文化会館)を会場に、西林乘宣会長率いる墨宣会書展が開催され、会創立60周年に当たる記念の催しとなった。前橋成人教室として西林先生が25歳の折から活動を開始、以来ほぼ10年ごとに展覧会を開催されてこられたといふ。

西林先生が25歳の折から活動を開始、以来ほぼ10年ごとに展覧会を開催されてこられたといふ。

会場には一人3～6点の2×8尺を中心とする力作が展示され、漢字作品が主流、楷書から篆書・隸書など多彩な内容で充実。15日には各界の名士をお招きして祝賀懇親会が盛大に開催された。お元気な先生のお姿に圧倒される。

内閣府 立入検査実施

9月21日、公益財團法人として内閣府より立入検査が行われた。

主に前年度事業実施内容、決算など会計処理上の検査及び確認、特に70周年記念事業内容と会計処理など、公益事業、収益事業含め総合的に検査が行われた。公益財團としての事業内容などには特に指摘はなく、細かい点で修正意見をいただいた。今後いただいた指導に基づいて適正に対応していく予定。

第70回毎日書道展東北仙台展

9月14日から19日まで、仙台市メティ

アテークを会場に第70回記念毎日書道展東北仙台展が開催された。今回展の実行委員長を本院佐藤無極評議員が担当され、メディアテーク5・6階フロアに1000点余の作品のほか、国際高校生選抜書展の優秀作品も展示され多彩に展開された。

初日開幕セレモニーに辻元大雲が担当理事として参加、開幕式および作品解説を行った後、席上揮毫も行った。東北にちなむ石川啄木の歌「やはらかに…」および自作の俳句2点を揮毫させていただいた。

16日には下谷洋子本院常務理事と柳碧鮮毎日理事が担当として解説、席上揮毫も披露した。午後からの祝賀懇親会も大盛況で東北仙台展を盛り上げた。月3日～7日、東北山形展、11月27日～12月2日、東海展と統いて開催される予定。ご高覧を。

会場には一人3～6点の2×8尺を中心とする力作が展示され、漢字作品が主流、楷書から篆書・隸書など多彩な内容で充実。15日には各界の名士をお招きして祝賀懇親会が盛大に開催された。お元気な先生のお姿に圧倒される。

主に前年度事業実施内容、決算など会計処理上の検査及び確認、特に70周年記念事業内容と会計処理など、公益事業、収益事業含め総合的に検査が行われた。公益財團としての事業内容などには特に指摘はなく、細かい点で修正意見をいただいた。今後いただいた指導に基づいて適正に対応していく予定。

漢字（一）

飯田春香

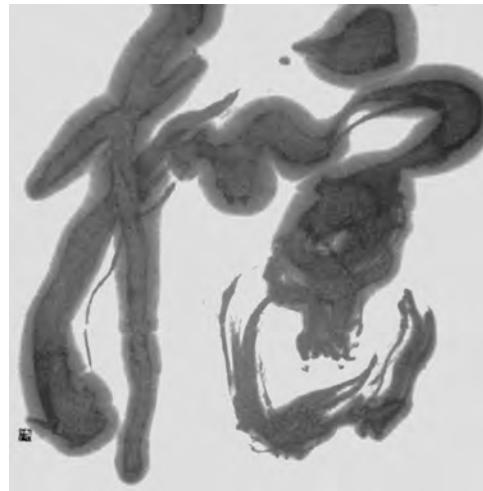
前衛書（一）

嵯峨大拙

大字書の魅力

今月から6回にわたり、個人の大字書に対する考え方、取り組み方を振り返りつつ、今後の作品制作の指針にしたいと思います。

大字書に取り組むようになったのは今から約40年前。そもそも書を習ったいと思ったのは金封や熨斗紙に筆でさらさらと書きたいとの思いでした。そこで一番身近な小学校の書道クラブに行つたのが始まりです。そこで指導してくださっていたのが恩地春洋先生でした。当時はまだ学校の先生をしておられましたので、授業が終わってから



飯田春香書

月2回、夜に成育小学校に来ていただき指導を受けている。暫くして大字書（当時は少字数書とか一字書と言われていました）を始めるようになり、先輩の方から大きな紙に一字だけ書けばいいからと誘われ、一字だけなら私もできるかなと安易に考え始めたのが今日に至っています。

後に、手島石卿先生の「燕」、「崩壊」等を目にするようになり、益々大字書の魅力にひきこまれました。

写真の「揺」は

「第42回毎日書道展」に出品し、幸運にも毎日賞

を頂き、「第5回書の研修視察団」に千葉蒼玄、半田藤扇両先生と共に参加させていただきました。団長は恩地

春洋先生でした。

21世紀の書

—私の主張—

初めに、常日頃作品制作について考えている事は、

1、シンメトリー

2、余白

3、落筆

4、一碑二面貌

5、潤渴

6、着色又は紙自体が色の紙
7、インテリアとしての作品

です。
第一回目は、墨を宿墨して書き、自然な飛沫と側筆・直筆を

粹に引き出す」と述べています。仲々文字を書かなくても、その美しさを純意味深い言葉です。



第64回書道芸術院展「安寧」

嵯峨大拙書

第54回 書道芸術院単位認定講習会（高知）

会場＝高知市 三翠園

会期＝平成30年8月25日（土）26日（日）

主管＝四国支局 運営委員長 大野 祥雲

台風20号の影響が心配される中、役員、講師、助講師の先生方、そして受講の皆様方の熱いパワーで吹き飛ばし、第54回書道芸術院単位認定講習会は四

国支局主管で、遠く青森から、また、南は九州より全国各地から147名のご参加をいただいて開催となりました。

開講式では、辻元理事長からご挨拶、下谷常務理事より激励の言葉、顧問の小伏竹村先生からは大阪・長野・高知の大字書についてのお話しをいただき、参加者全員、気持ちを引き締めての講習会スタートとなりました。

1日目は、開講式に続いて刻字・現代詩文書・かな・前衛書・漢字の各部の実技と講義、2日目は原拓書道史・院史・一般教養と実施されました。



開講式



刻字の講義

【現代詩文書】
講 師 大平 邑峰 先生
助講師 赤澤 東洞 先生
なぜそう書くかという明確な動機と自分の思い通りに書けるだけの技術、書かれた姿に言葉の意味以上の何かが宿っていることが大事。

大平先生は、一定のリズム、流れや呼吸、余白を意識しながら、筆が紙にいく込んでいく作品を揮毫。寡黙で優しいお人柄の中にある、作品に対する厳しさや情熱、並々ならぬ真摯な取り組みに感じ入ってしまいました。

（川島 舟錦記）



刻字講師による実技指導

【刻字】

講 師 清水 翠径 先生
助講師 丸山 筑峰 先生

「干支を彫る」をテーマに講習会がスタート、今回は自書自刻で、木目調のセラミック板にV字型で陰刻。刻字作品は立体感と迫力で近年生活インテリアとして注目されています。両先生は受講者席を廻り刻し方をアドバイス、補刻もしてくださいり、理解が深まりました。時間が迫る中制作に追われましたが、未知の分野への挑戦であり、楽しい時間でした。（下谷 嶺雲記）

【現代詩文書】

講 師 大平 邑峰 先生
助講師 赤澤 東洞 先生

なぜそう書くかという明確な動機と自分の思い通りに書けるだけの技術、書かれた姿に言葉の意味以上の何かが宿っていることが大事。

大平先生は、一定のリズム、流れや呼吸、余白を意識しながら、筆が紙にいく込んでいく作品を揮毫。寡黙で優しいお人柄の中にある、作品に対する厳しさや情熱、並々ならぬ真摯な取り組みに感じ入ってしまいました。



現代詩文書講師からのアドバイス



現代詩文書の講義



かなの講義

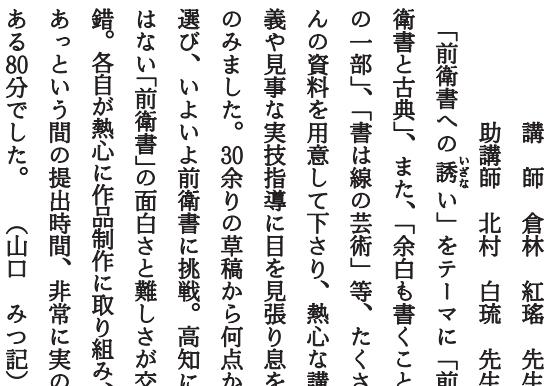
(朝倉 希代子記)

かな

講 師 木村 東舟 先生
助講師 松村 くに子先生

「関戸本古今和歌集拡大臨書」の講義は、かなの成立や種類、臨書の意義等から始まり、関戸本古今和歌集の大字臨書へと展開していきました。拡大臨書は、大字かな作品制作へと繋がる第一歩目の勉強法だそうです。先生の穩やかで優しい口調が会場全体を包み込み、まるで平安時代にタイムスリップしたかのような雅な時間が流れました。

(朝倉 希代子記)



かなの講義

「前衛書への誘い」をテーマに「前衛書と古典」、また、「余白も書くことの一部」、「書は線の芸術」等、たくさんの資料を用意して下さり、熱心な講義や見事な実技指導に目を見張り息をのみました。30余りの草稿から何点か選び、いよいよ前衛書に挑戦。高知にはない「前衛書」の面白さと難しさが交錯。各自が熱心に作品制作に取り組み、あつという間の提出時間、非常に実のある80分でした。

(山口 みつ記)

【前衛書】

講 師 倉林 紅瑠 先生
助講師 北村 白琉 先生



前衛書講師からアドバイスを受ける受講生



かな模範作品

前衛書への誘い



前衛書の講義

【漢字】



漢字の講義

講師 半田 藤扇 先生
助講師 三浦 鄭街 先生
横形式作品を創る段階的な手立てをご提示くださいました半田先生。
○柱とすべき古典作品を学び、作品の土台とすること。

○作品に存在感をもたせるために、あらゆる面から分析・検討すること。
等、臨書から創作への過程を丁寧にご教授いただきました。古典を学び線を磨くこと、表現力を鍛える努力をするこの大切さを痛感する80分でした。

(大山 和歌子記)

【院史】



漢字講師の模範揮毫

【原拓書道史】

講師 種谷 萬城 先生
助講師 三浦 鄭街 先生

今回は「山東省の書道遺跡」がテーマでした。実物大の原拓から迫つてくる威力に圧倒。それぞれの原拓の解説を聞いていただきましたが、鄭羲下碑の原拓には参りました。字間・行間のゆとり、堂々とした広がり、さすがです。泰山金剛經からは、大らかな太さやゆとりを訴え、仏教信仰の心を学んでいく書が伺えて、心の温かさを感じました。何と言っても、書のスケールの大きさや線など、原拓からじかに学び取ることの偉大さをひしひしと感じました。

(演田 尚川記)



鄭羲下碑の原拓の前で



山東省の原拓鑑賞



書道芸術院史

講師 辻元 大雲 先生
助講師 片岡 豪峰 先生
敗戦後、国民全体が貧窮にあえぐ中、新書道の機運澎湃として起こり、一九四七年伊藤神谷先生（高知県出身）の名発起文をもとに広く同志を募り発足、幾多の困難を乗り越えながら諸先生方のご努力により日本を代表する存在となつたことなど院の歩みをお話しくださいました。院の活動として、活躍されている諸先生の作品解説を主に、海外書展の先達など述べられました。

(唐岩 碧水記)

【一般教養】

高知城歴史博物館館長

渡部 淳 氏

演題「山内家資料と博物館の仕事」



渡部館長による講演

(唐岩 碧水記)

人間の歴史を語るにおいて、如何に史実を正確に把握し、文化遺産として誤りのない指針を示すか、大切な使命を持つのが博物館の存在です。渡部先生は、博物館の仕事をわかりやすく、楽しくご講演くださいました。

また、寄贈された山内家の資料一万五千余点は、全国に誇る貴重なものであり、研究学習観光振興の使命も併せ持つとのお話をいただきました。



認定証授与

すべての講習を終え、閉講式では認定証授与、代表謝辞と続き、次年度開催の北関東総局へバトンタッチを行いました。

南国土佐にお集まりくださいました受講の皆様、各所で支えていただき、

また、非常に内容の濃い講義をしてくださった役員、講師、助講師の先生方、ありがとうございました。

ありがとうございました。県内スタッフ一同、それぞれが成長できる機会をいただきましたことに、心から感謝を申し上げます。



次年度担当北関東総局へバトンタッチ



受講生代表謝辞



懇親会—四国支局の労作「筆まるくん」を囲んで、土佐名物皿鉢(さわち)料理をいただきました



全員が鳴子をもって参加。大盛り上がりの「よさこい鳴子踊り」

第72回書道芸術院展

— 併催 第70回記念 全国学生書道展 —

2019年2月6日(水)～11日(月祝) 9:30～17:30 (入場は30分前まで)
(11日は14時閉室)

上野公園 東京都美術館

(ロビー階 第3・4展示室 1階 第3・4展示室 2階 第2・3・4展示室)



私たちが日本の伝達文化の
コミュニケーション文化を発展させ
る活動を行っています。

一般公募・無鑑査	2018年12月3日
作品・書類受付	
審・審候	2019年1月18日
書類受付	
作品搬入	2019年1月27日

主催 公益財団法人 書道芸術院
後援 文化庁・(公社)全日本書道連盟
毎日新聞社・(一財)毎日書道会

第72回書道芸術院展併催

全国学生書道展

・全国学生書道展指導者作品展示

70回 記念

作品
募集 締切
10月17日(水)

平成
とき 31. 2.6～11
(水) (月祝)

2月6日～10日(9:30～17:30・入場は30分前まで)
2月11日(14:00終了・入場は30分前まで)
《席上揮毫会》 日 時 平成31年2月10日(日)
10:00～11:00

会 場 東京都美術館

後 援

文 化 庁
公 益 社 团 法 人 全 日 本 書 道 連 盟
每 日 新 聞 社
每 日 小 学 生 新 聞



主 催 公 益 財 団 法 人 書 道 芸 術 院



漢字研究部臨書課題

II (半紙普通判・縦使用) 左記の法帖より何文字臨書してもよい。

李嶠 雜詠残巻 平安 伝嵯峨天皇 ①

特別研究部臨書課題

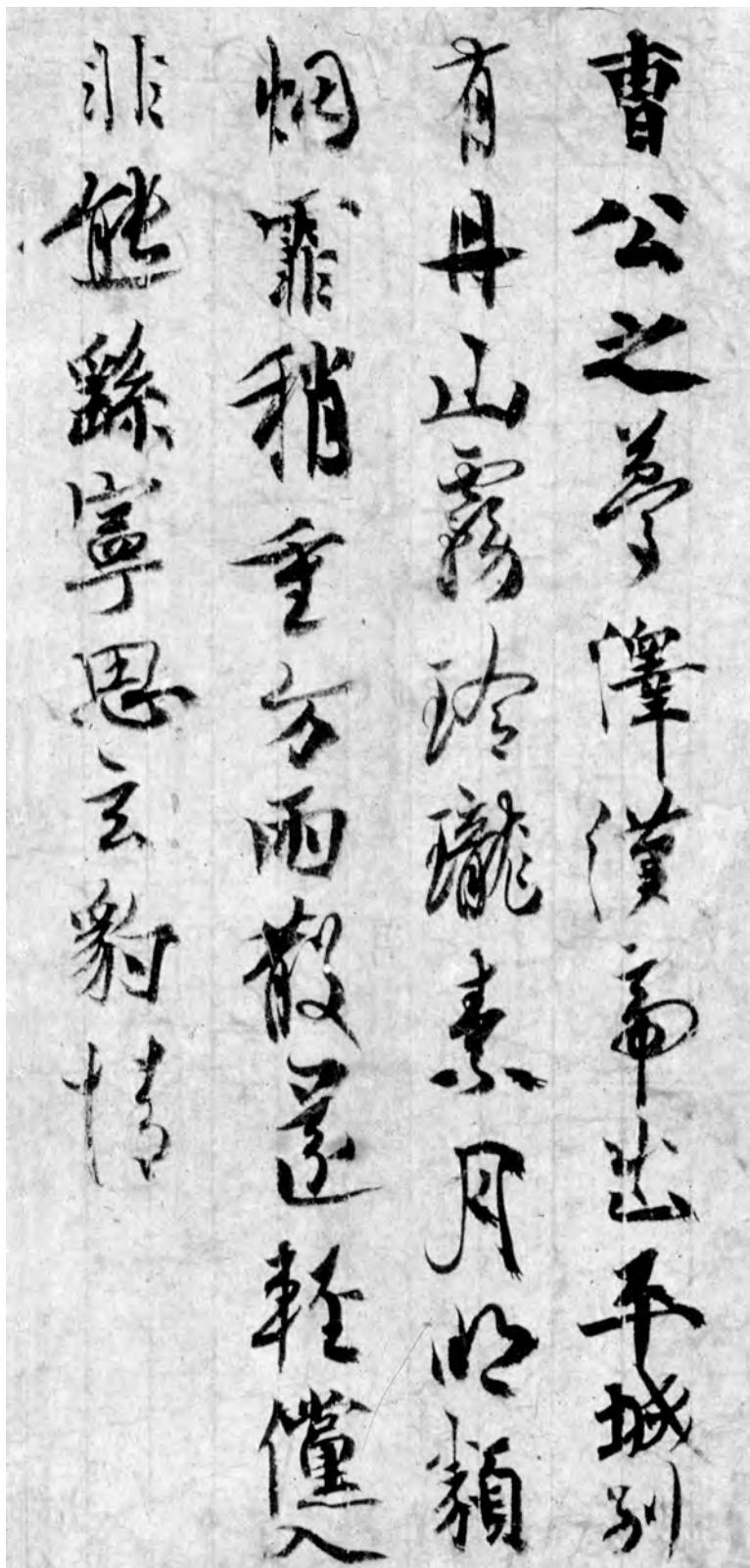
II (毎日展公募サイズ以内・縦横自由)

当該古典の左記掲載部分以外も可。

〈解説〉 唐の詩人李嶠(649~713)の五言律詩を収めた詩集『李嶠雜詠』を行草体で書写した巻物である。巻頭の目録に、「乾象」「坤儀」「芳草」詩ほか12項目120首を書写されたことが記されている。しかし、現在宮内庁保管(京都御所東山御文庫蔵)の巻首から20首までの御物一巻と、それに続く1首分の断簡が陽明文庫所蔵の近衛家の「大手鑑」(国宝)に残っているのみである。その他の所在

は不明である。料紙は紙簾紙(紙に簾のある白麻紙)、御物本26.1×238センチ全106行。巻頭の目録部分は2段6行、陽明文庫本26.1×13センチ全5行から成る。その書は、初唐の欧阳詢の書法の影響を強く受けているとされ、和様化する以前(平安時代初期)のわが国の書法を知る上で、貴重な資料である。

(編集部)

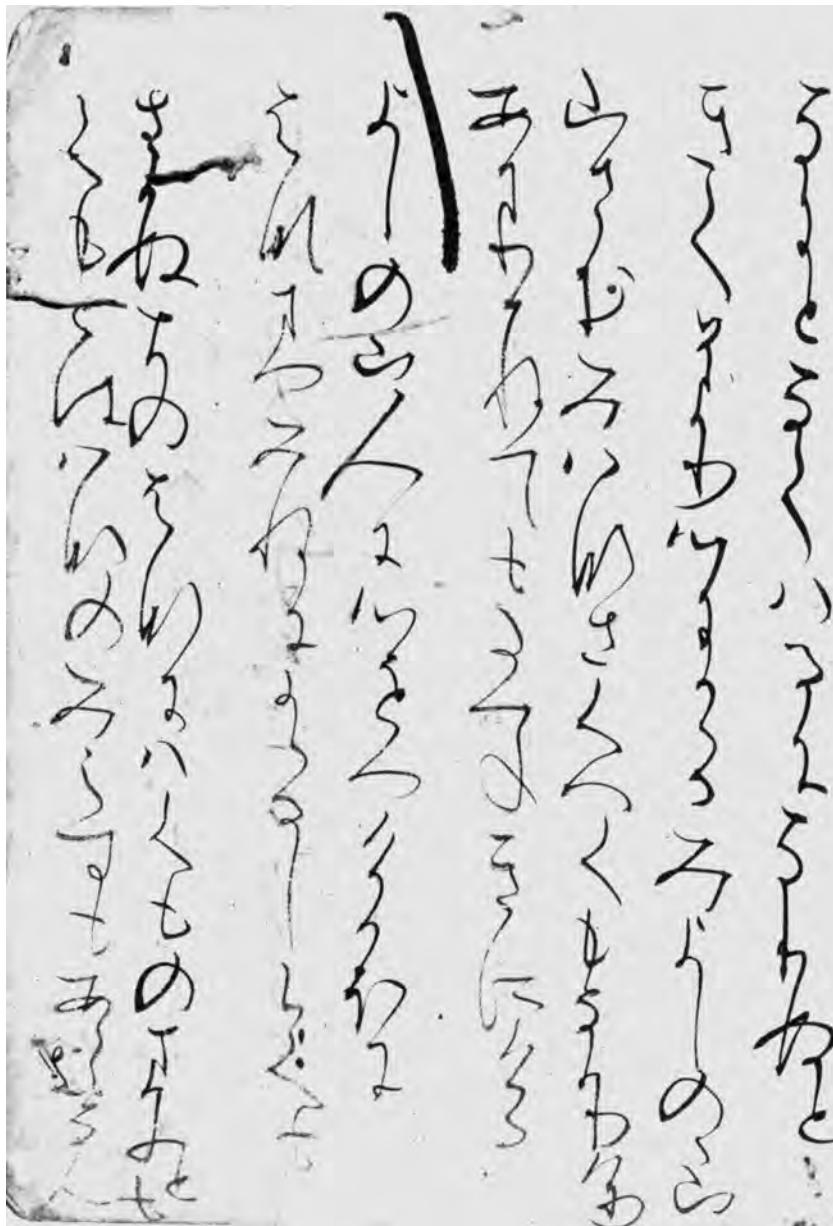


(掲載図版90%に縮小)

※落款を必ず入れる。署名、もしくは○○臨(押印のみも可)

曹公之夢澤、漢帝出平城。別有丹山霧、玲瓏素月明。類烟霏稍重、方雨散還輕。僅入非熊絲、寧思玄豹情。

山家心中抄 平安伝 西行筆 ①



(宮内庁蔵)

特別研究部
臨書課題

(毎日展公募サイズ以内・縦横自由) 上記の掲載以外も可。

かな研究部
別紙を裁断して貼付も可。半透紙は半紙サイズに切って使用のこと。
上記の古筆の掲載部分より歌一首以上を書く。(全臨も可)※落款を必ず入れる。署名、も
しくは〇〇臨(押印のみも可)<よみ>
なにとなくはるになりぬと
きく口より心にかゝるみよしのゝ山
山さむみはなさくべくもなかりけり
あまりかねてもたづねきにける
よしの山人に心をつけがほに
はなまつみねにかゝるしらくも
さかぬまのはなにはくものまがふとも
くもとははなのみえずもあらなん

<解説>
西行の家集（個人の和歌を集めたもの）で、「花月帖」ともいう。古来、西行自筆と伝えられている枠型（縦16.5cm）の縦葉装の冊子本、料紙は素紙（加工されていない紙）である。その書は、書風の違いから三人の寄合書とされている。西行の自筆である「一品経和歌懐紙」（京都民芸館蔵）と比較して、いずれも西行の真跡と認められない。巻頭の内題、端書の書名、注記が、藤原俊成（1114～1194）の筆跡であることから、この書は、俊成にゆかりのある能書家三人が分担書写した草稿本と考えられている。それを第一種、二種、三種とよび、写真図版は第一種である。三種類の書風のうち、この第一種が最も格調高いといわれている。

(編集部)

※古筆は原寸（以上も可）
で臨書しましょ。

辻元大雲

地富天高
(地富み天高し)

田畠はよく肥えており、秋の空は高く澄み渡っている

今回から6回担当します。四字句4回、五字句2回としました。

初回は平易な行書表現で、田畠は

よく肥えており、秋の空は高く澄み渡っているの意です。伸びやかな温泉銘の雰囲気を意識してみました。使用した筆は羊毫中長峰で、軽やかなリズムで運筆しています。

上級課題は書体自由ですので色々な表現が楽しめます。楷行草篆隸の五体といつても更に書風の変化により千差万別の表現となり、書の表現領域は無限といえるでしょう。それら表現の幅を広げる基は普段からの古典臨書を基礎として、多様な試みを積み重ねることだと思います。その意味であまり偏らない、柔軟な姿勢を保つことが大切です。様々な表現へ挑戦してみてください。

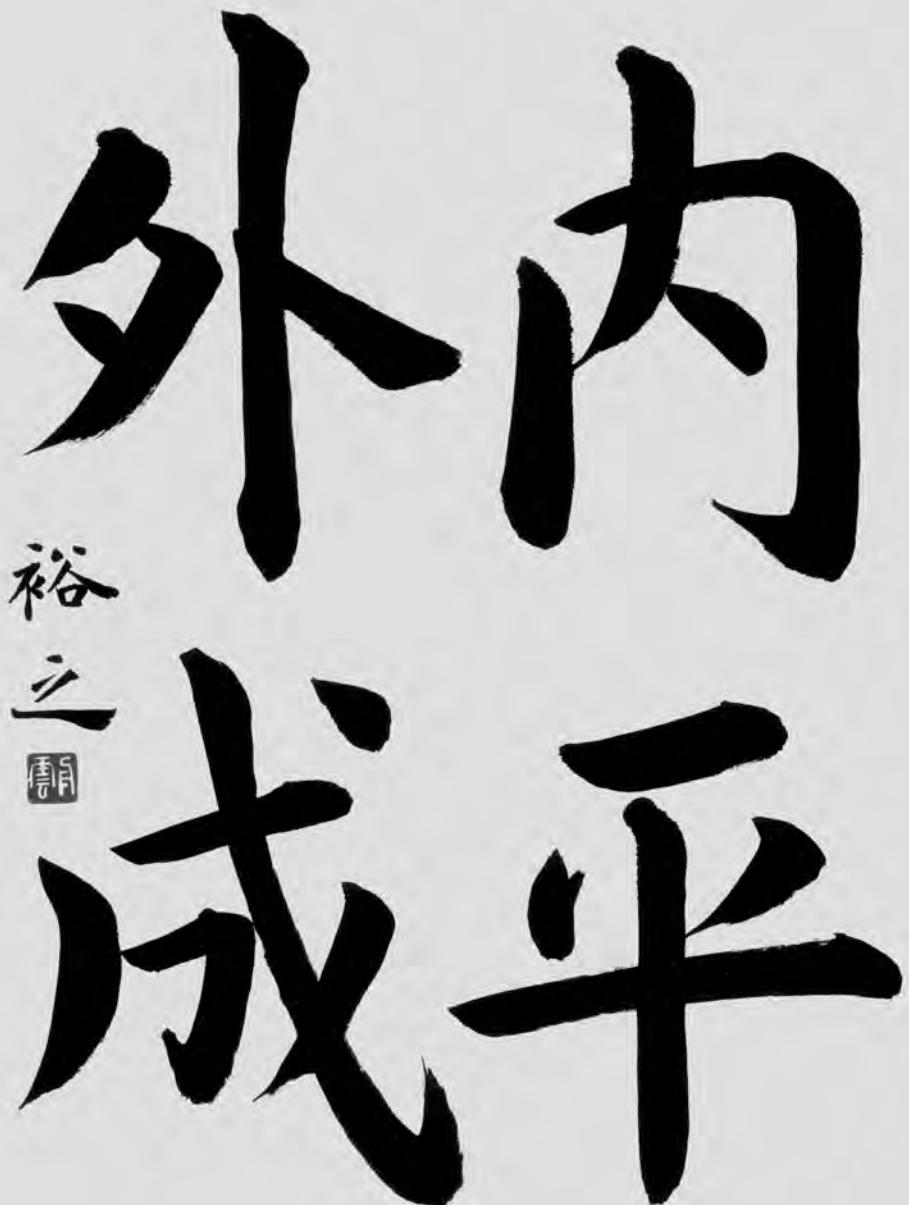
地富天高 よみ(地富み天高し)

書体=自由



広瀬舟雲

内平外成
（内平かに外成る）
（史記）五帝本紀



書体＝楷書

かつて「平成」と墨書きされた額を持って、小渕官房長官(当時)が新元号を発表。それからや三十一年。慣れ親しんだ平成も約半年後には改元するという報道がありました。「平成」の出典は「内平・外成」(『史記』)と「天平・地成」(『書經』)のふたつの書物に記述された漢文の四字句から二文字を選び作成されたものです。前者は「国内外とも平和が達成される」、後者は「國の天地とも平和が達成される」の意味で、平成とは、平和が達成されることを願って名づけられたものであることが判ります。前者を、虞世南の「孔子廟堂碑」のような穏やかな筆使いで書いてみました。

かな規定 初段以上【十一月十五日締めき】用紙 半紙普通判（料紙可）

鈴木せつ子選書

習い方解説 (一)

鈴木せつ子

君待^{まわ}とわが恋^なひをればわが^や戸^と
すだれ動^{なげ}かし秋^{あき}の風^{かぜ}吹^ふく
(額田王・万葉集)

秋の夜長に、いつまでたっても
来ない天智天皇の訪れを待ちわ
び、かすかな簾の音に一瞬心を
ときめかすが、風だとわかつて
嘆いているの意。

一般的な、かなの散らし書きの
方法として、紙面に対角線を想定
し、三角形空間内で、行の配列を
考える三角法構成がありますが、
今回は「塊と線」にしました。

右の小さな文字群（塊）は、行
間をやや広めに取り、左の三行は
下部の密度を高くし、一本の線の
ようにします。

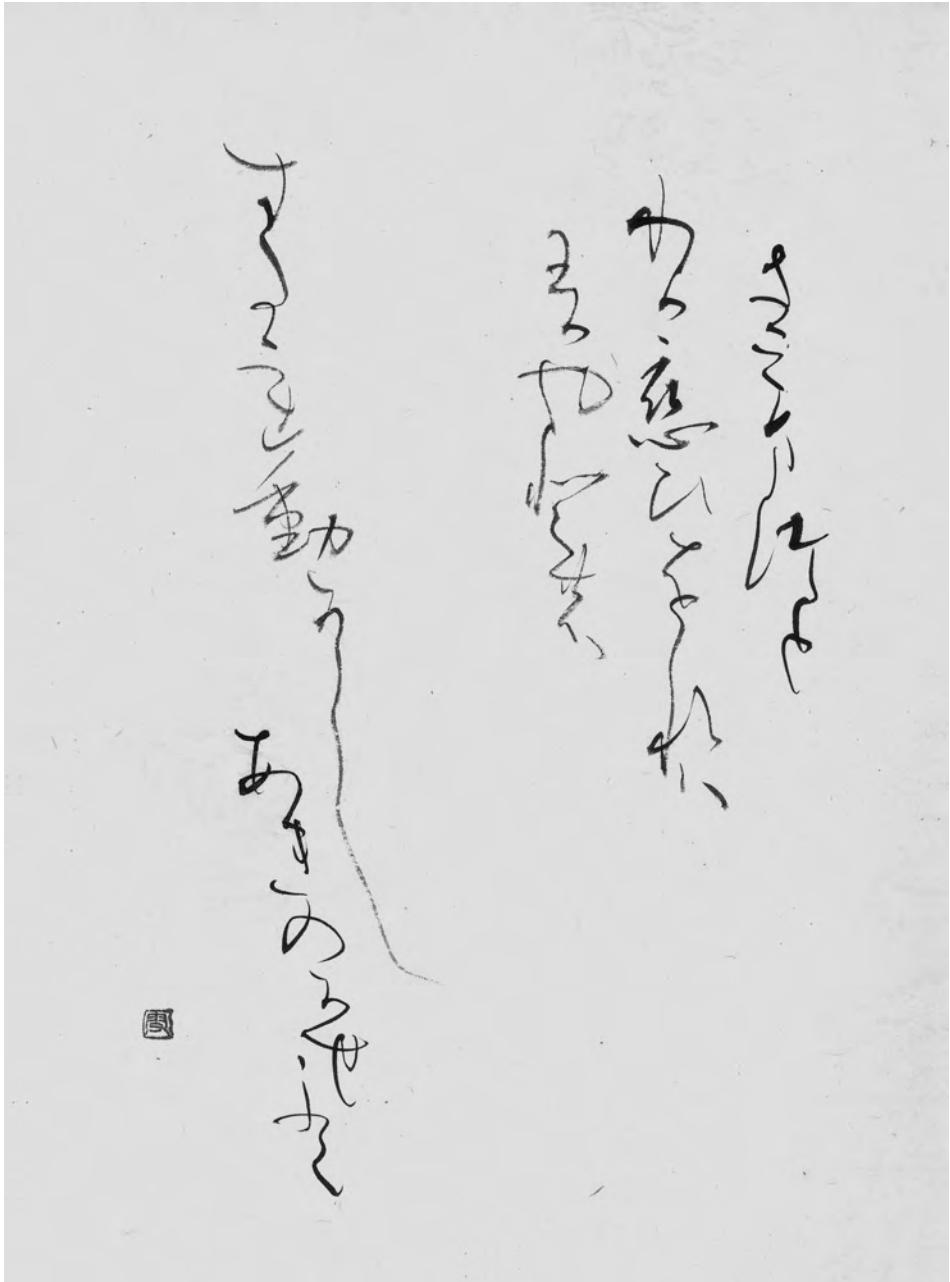
筆先の勢いと、筆圧の変化を意
識した線で反復練習をして、自分
なりのリズムをつかみ仕上げて下
さい。筆は玉毛を使用。

圖

よみ方 君(支)二)待(万)つ(徒)とわが(可)恋ひをれば(ハ)わ(王)が(可)屋(や)四(登)の(農)

すだ(多)れ(連)動か(可)し秋(あき)の風(可せ)吹(ふ)く(久)

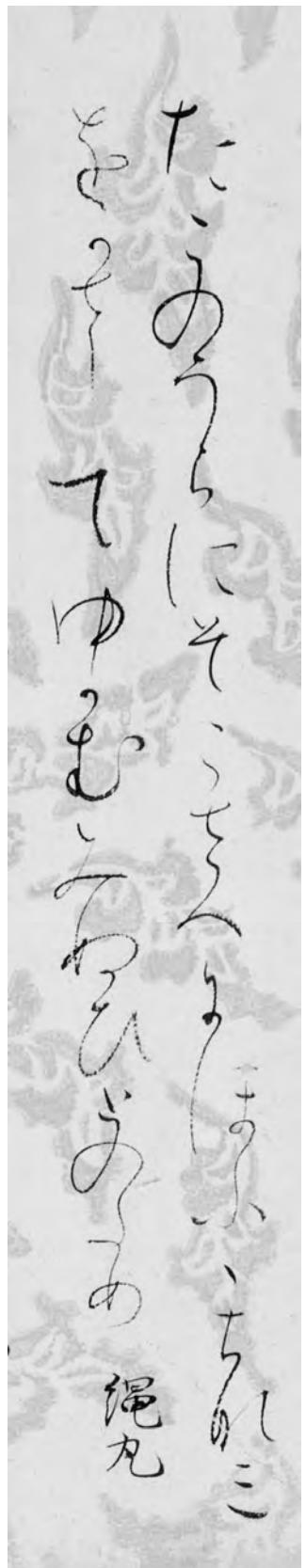
創作



かな規定 秀級以下【十一月十五日締めきり】用紙 半紙タテ $\frac{1}{2}$ （料紙可）（たて32センチ・よこ12センチ）

掲載写真的和歌を臨書する。または部分（2字以上の連綿）を臨書する。

粘葉本和漢朗詠集
(掲載写真拡大120%)



よみ方 たゞのうらにそこさへに(尔)ほふぶ(ノ)ぢな(那)み(い)
をか(可)ぞしてゆか(可)むみぬひとのた(多)め 繩丸

習い方解説 (一)

佐藤 希雲

選書

かな条幅規定【十一月十五日締めきり】用紙 小画仙紙半切（料紙可）

佐藤 希雲選書

時によりすぐれば民のなげきなり
八大龍王雨やめたまへ

（源実朝・金槐集）

鎌倉幕府三代将軍・源実朝の和歌です。漢字が多いので適宜かなに置きかえる必要がありますが、「八大龍王」は漢字のままが良いでしょう。墨つぎは「龍」でも、「あめ」でもどちらでもよいと思います。工夫して下さい。

よみ方 時に(尔)より(利)すぐ(久)れば(盤)民のな(那)げ(介)き(支)なり(也)
八大龍王雨(あ免)やめたま(刀)べ

創作

*タテ形式に限る

漢字条幅規定 初段以上 [十一月十五日締めきり] 用紙 小画仙紙半切

小林琴水選書

習い方解説 (一)

小林琴水



書体=自由

創作する前に色々な臨書の用筆法を手に入れ、作品制作に取り組む事が基本です。線の強さ、造形は臨書から生まれてきます。書き出しは静かに入り、空間に横への流れを作ります。2行目は大きな動きで終筆の縦画を思い切って…最後5文字は、静かに終ります。

*タテ形式に限る

習い方解説 (一)

千葉蒼玄

「神仙の甘露、光り輝く真珠」

漢字条幅規定 秀級以下 [十一月十五日締めきり] 用紙 小画仙紙半切

千葉蒼玄選書



書体=自由



創作となると、自己流になりますが、古典からの応用(倣書)もまた勉強になります。今回は集王聖教序の有名な部分「仙露明珠」を基に創作してみました。秋になりましたがすがしい季節になりました。朝、散歩していると緑の葉の上に朝露がきらきら輝きます。のびのびと書きたい字です。

仙露明珠
(仙露明珠)

見越雪枝

この明るやの中へ

ひとつのかわいらしい素朴な琴をおけば
秋の美くしさに耐えかねて

琴はしづかに鳴り、いたずだらう

八木重吉「素朴な琴」雪枝書

今回から6回担当します。

この中で、「字配りよく書く」ためのポイントを説明したいと思います。普段書き慣れているペン字ですが、一文字一文字はとても良い字形なのに文章にすると流れ、気脈がない。そこで調和(字配り)が必要と考えます。

「字配りよく書く」とは、紙面の大きさを程良くとり文字の中心を揃え、字間や行間を整えて調和良く書く事です。一文字から一行へ、一行から文章全体へという流れの中で、その間に書かれるいくつかの配慮すべき事を総合したものが字配りだと言えましょう。

今回の課題は詩文です。基本形の楷書です。水性のペン先の硬いサインペンで仕上げました。

※落款(自分の名前)を必ず入れる。

用紙=はがきの大きさ(14.8×10cm)、白色のもの、黒インク使用のこと

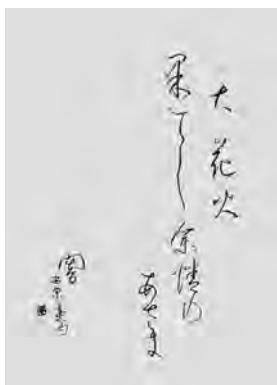
書体=自由

今月の

ホープ作品 各部総評 No. 688

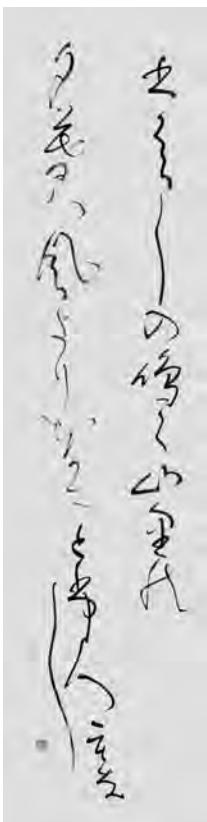
かな部 師範 加藤 翠陽
リズム、線質もよいが、何より全体のバランスが美しい。墨色が少々薄いが品格を醸す姿です。

◎かな部総評 俳句は歌より当然文字が大きくなるが、過剰すぎるものは見苦しい。伸びやか、大らかを誤解せぬようだ。（洋子評）

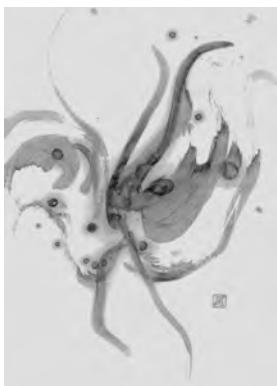


漢字条幅部 師範 大槻 刚洞
力強い連筆のリズムで木簡昂書風に表現。骨格のしつかりした線質で、安定感も醸し出している。

◎漢字条幅部総評 上級21字の多字数表現が難しかった感あり。全体として弱々しさが目立つ。下級も含め基礎力の養成を。（大雲評）



かな条幅部 師範 小林 嘉江
迷いのなさが淀みない線となり、やや控え目な表現が格調高い雰囲気を醸し出した。料紙選び大成功。



◎かな条幅部総評 筆致が雑でかならしさを欠く作品が目立つた。

墨汁は厳禁。変体がな保の誤字多く残念。調べる習慣を。（明子評）



前衛書部 特選 石崎 甘雨

墨色美しく温かみあり。筆の流れに淀みなくほのかな情感醸し出す。印の工夫を！

◎前衛書部総評 全体的にレベルアップ。余白を生かした効果的作品多数。紙質の工夫を！（京子評）

現代詩文書部 特選 西山 萌龍

意表をつく三群構成で見る者の目を引き、素朴な線表現で句の温かさを楽ししく読ませる。

◎現代詩文書部総評 工夫に富む意欲作多く、個々が楽しみながら書作する姿が窺える。（岳峰評）

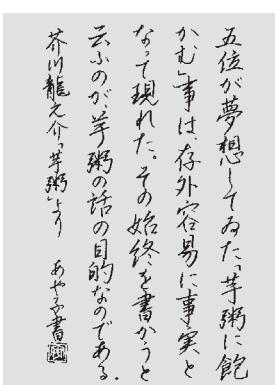


漢字部 師範 西館 四草

重厚な線質の古隸。書作者の立ち位置、風土を感じる。土俗的なエネルギー、情熱が線性に見える。

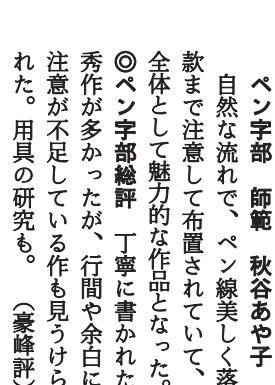
◎漢字部総評 落款も本文と調和するよう心を配りたい。小筆を用いたもの、楷書に草書の落款等々。

（翠風評）



ペン字部 師範 秋谷あや子
自然な流れで、ペン線美しく落款まで注意して布置されていて、全体として魅力的な作品となった。

◎ペン字部総評 丁寧に書かれた秀作が多くたが、行間や余白に注意が不足している作も見つけられた。用具の研究も。（豪峰評）



五位が夢想してゐた芋粥に飽かむ事は存外容易に事實とちて現れた。その始終を書かうとしたのが芋粥の話の目的なのである。

芥川龍之介「芋粥」より あや子書風

今月の

特別研究部優秀作品(特選)

選評 辻元大雲 山口仙草 半田藤扇 大辻多希子

臨書

(紅瑠) 金井みどり

漢字 (大雲)

江本興舟

李白詩

集王聖教序



金井みどり 臨

70×138cm

部分拡大



江本興舟書



180×53cm

◆鋭い筆致で書き進む。行目の文字造形にあと一步。適度な潤渴表現を追求された事は効果的となる。

◆渦筆と重厚な深い線の織りなす個々の文字に敬服。巧みな筆捌きに筆力が充分にこもっている。

(藤扇評)

現代詩文書

(玄穹) 千葉紅雪

(大雲評)

(多希子評)



千葉紅雪書

60×180cm

「月ははるかな都より」

◆独特の青淡墨による潤渴の変化と軽快な運筆が紙面にリズム感を漂わせ明るく楽しい作。(大雲評)

◆紙面を自由自在に使い終始一貫した世界観を創る。遊絲線の如く情緒豊かな表現力を醸し出す。(藤扇評)

◆淡墨の滲みと、切れのある細線による変化が近景と遠景を生み出す。変化に富んだ構成が冴える。

(多希子評)

◆横形式の構成と変化に富んだ字形が紙面に動きを生んでいる。清く澄んだ線が爽快で、格調高い作品となつた。(仙草評)

◆やや固めの筆を使用か。鋭い切れ味がリズムを生み、爽やかな気分を醸し出す。やや散漫な感あり。

(大雲評)

◆字形の変化、線質の鋭い動きによりリズム感のある作となつた。行間の余白が美しい。(仙草評)

(仙草評)

前衛書 (白珠)

工藤史音



工藤史音書

180×60cm

「奏でる」

- ◆躍動感あふれる書線でスケールが大きく好感がもてる。上部はさらに重みを持たせてもよかつた。
- ◆筆勢が見事に生きる運筆。上部から下部への線の表裏、筆者の鼓動を感じる作。高度な技術の持ち主。

(仙草評)

- ◆流動感あふれる濃墨の表現。上部より下部へ、捻転しながら進む線条は激しい気迫を感じる。(多希子評)
- ◆上部から下部への大胆な運筆が魅力。潤渴の変化と共に激しい気迫を感じる。上部やや混み過ぎか。

(大雲評)

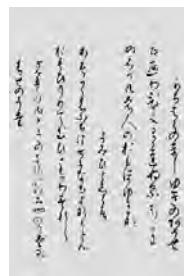
臨書 (千葉) 猪又理扇 「関戸本古今和歌集」



猪又理扇 臨

24×176cm

部分拡大



(仙草評)

- ◆原帖をよく観察し、細部の微妙な変化もよく表現している。一貫したリズムに乱れはなく好感。
- ◆関戸本の特徴をよく理解し、流麗な流れを表現、細やかで巧みな線の味わいを生み出している。
- ◆関戸本古今集に真摯に取り組み敬服。流麗なりズムで俯仰法を巧みに使い、品位ある作品となつた。

(藤扇評)

(多希子評)

- ◆線の太細・筆圧の変化などの特徴を良く捉えている。流麗な流れの部分も、丁寧に表現され美しい。
- ◆やや強めの骨力ある線が緊張感をもたらす。筆の動きを存続させるために紙面に動きを与えている。潤渴の変化硬筆が効果を挙げている。

(大雲評)

現代詩文書 (もくせい) 西川藤象



西川藤象書

70×138cm

- ◆やや強めの骨力ある線が緊張感をもたらす。筆の動きを存続させるために紙面に動きを与えている。潤渴の変化硬筆が効果を挙げている。
- ◆やや強い骨力ある線が緊張感をもたらす。筆の動きを存続させるために紙面に動きを与えている。潤渴の変化硬筆が効果を挙げている。
- ◆強調な線の中に小気味よいリズムを取り入れる。漢字の造形を工夫すると更に格調が高くなると思う。
- ◆強調な線の中に小気味よいリズムを取り入れる。漢字の造形を工夫すると更に格調が高くなると思う。

(藤扇評)

(多希子評)

- ◆変化に富んだ筆致により多彩な表情を見せていて。研ぎ澄まされた線質により説得力のある作品となつた。
- ◆生き生きと、生命が宿ったような作。線が自在に躍動しながら横への展開は見る人を引き込む力を感じる。
- ◆生き生きと、生命が宿ったような作。線が自在に躍動しながら横への展開は見る人を引き込む力を感じる。

(仙草評)

「飯田龍太の句」

創作の部 (49点)

漢字 - 7点

かな - 3点

現代 - 21点

前衛 - 0点

篆刻 - 0点

漢字 - 31点

かな - 3点

現代 - 18点

前衛 - 18点

篆刻 - 0点

漢字 - 34点

かな - 3点

現代 - 21点

前衛 - 0点

篆刻 - 0点

漢字 - 31点

かな - 3点

現代 - 21点

前衛 - 18点

篆刻 - 0点

漢字 - 34点

かな - 3点

現代 - 21点

前衛 - 0点

篆刻 - 0点

漢字 - 31点

かな - 3点

現代 - 21点

前衛 - 0点

篆刻 - 0点

漢字 - 34点

かな - 3点

現代 - 21点

前衛 - 0点

篆刻 - 0点

漢字 - 31点

かな - 3点

現代 - 21点

前衛 - 0点

篆刻 - 0点

漢字 - 34点

かな - 3点

現代 - 21点

前衛 - 0点

篆刻 - 0点

漢字 - 31点

かな - 3点

現代 - 21点

前衛 - 0点

篆刻 - 0点

漢字 - 34点

かな - 3点

現代 - 21点

前衛 - 0点

篆刻 - 0点

漢字 - 31点

かな - 3点

現代 - 21点

前衛 - 0点

篆刻 - 0点

漢字 - 34点

かな - 3点

現代 - 21点

前衛 - 0点

篆刻 - 0点

漢字 - 31点

かな - 3点

現代 - 21点

前衛 - 0点

篆刻 - 0点

漢字 - 34点

かな - 3点

現代 - 21点

前衛 - 0点

篆刻 - 0点

漢字 - 31点

かな - 3点

現代 - 21点

前衛 - 0点

篆刻 - 0点

漢字 - 34点

かな - 3点

現代 - 21点

前衛 - 0点

篆刻 - 0点

漢字 - 31点

かな - 3点

現代 - 21点

前衛 - 0点

篆刻 - 0点

漢字 - 34点

かな - 3点

現代 - 21点

前衛 - 0点

篆刻 - 0点

漢字 - 31点

かな - 3点

現代 - 21点

前衛 - 0点

篆刻 - 0点

漢字 - 34点

かな - 3点

現代 - 21点

前衛 - 0点

篆刻 - 0点

漢字 - 31点

かな - 3点

現代 - 21点

前衛 - 0点

篆刻 - 0点

漢字 - 34点

かな - 3点

現代 - 21点

前衛 - 0点

篆刻 - 0点

漢字 - 31点

かな - 3点

現代 - 21点

前衛 - 0点

篆刻 - 0点

漢字 - 34点

かな - 3点

現代 - 21点

前衛 - 0点

篆刻 - 0点

漢字 - 31点

かな - 3点

現代 - 21点

前衛 - 0点

篆刻 - 0点

漢字 - 34点

かな - 3点

現代 - 21点

前衛 - 0点

篆刻 - 0点

漢字 - 31点

かな - 3点

現代 - 21点

前衛 - 0点

篆刻 - 0点

漢字 - 34点

かな - 3点

現代 - 21点

前衛 - 0点

篆刻 - 0点

漢字 - 31点

かな - 3点

現代 - 21点

前衛 - 0点

篆刻 - 0点

漢字 - 34点

かな - 3点

現代 - 21点

前衛 - 0点

篆刻 - 0点

漢字 - 31点

かな - 3点

現代 - 21点

前衛 - 0点

篆刻 - 0点

漢字 - 34点

かな - 3点

現代 - 21点

前衛 - 0点

篆刻 - 0点

漢字 - 31点

かな - 3点

現代 - 21点

前衛 - 0点

篆刻 - 0点

漢字 - 34点

かな - 3点

現代 - 21点

前衛 - 0点

篆刻 - 0点

漢字 - 31点

かな - 3点

現代 - 21点

前衛 - 0点

篆刻 - 0点

漢字 - 34点

かな - 3点

現代 - 21点

前衛 - 0点

篆刻 - 0点

漢字 - 31点

かな - 3点

現代 - 21点

前衛 - 0点

篆刻 - 0点

漢字 - 34点

かな - 3点

現代 - 21点

前衛 - 0点

篆刻 - 0点

漢字 - 31点

かな - 3点

現代 - 21点

前衛 - 0点

篆刻 - 0点

漢字 - 34点

かな - 3点

現代 - 21点

前衛 - 0点

篆刻 - 0点

漢字 - 31点

かな - 3点

現代 - 21点

前衛 - 0点

篆刻 - 0点

漢字 - 34点

かな - 3点

現代 - 21点

前衛 - 0点

篆刻 - 0点

漢字 - 31点

かな - 3点

現代 - 21点

前衛 - 0点

篆刻 - 0点

漢字 - 34点

かな - 3点

現代 - 21点

前衛 - 0点

篆刻 - 0点

漢字 - 31点

かな - 3点

現代 - 21点

前衛 - 0点

篆刻 - 0点

漢字 - 34点

かな - 3点

現代 - 21点

前衛 - 0点

篆刻 - 0点

漢字 - 31点

かな - 3点

現代 - 21点

前衛 - 0点

篆刻 - 0点

漢字 - 34点

かな - 3点

現代 - 21点

前衛 - 0点

篆刻 - 0点

漢字 - 31点

かな - 3点

現代 - 21点

前衛 - 0点

篆刻 - 0点

漢字 - 34点

かな - 3点

現代 - 21点

前衛 - 0点

篆刻 - 0点

漢字 - 31点

かな - 3点

現代 - 21点

前衛 - 0点

篆刻 - 0点

漢字 - 34点

かな - 3点

現代 - 21点

前衛 - 0点

篆刻 - 0点

漢字研究部
(集王聖教序)

選評名 越 蒼 竹

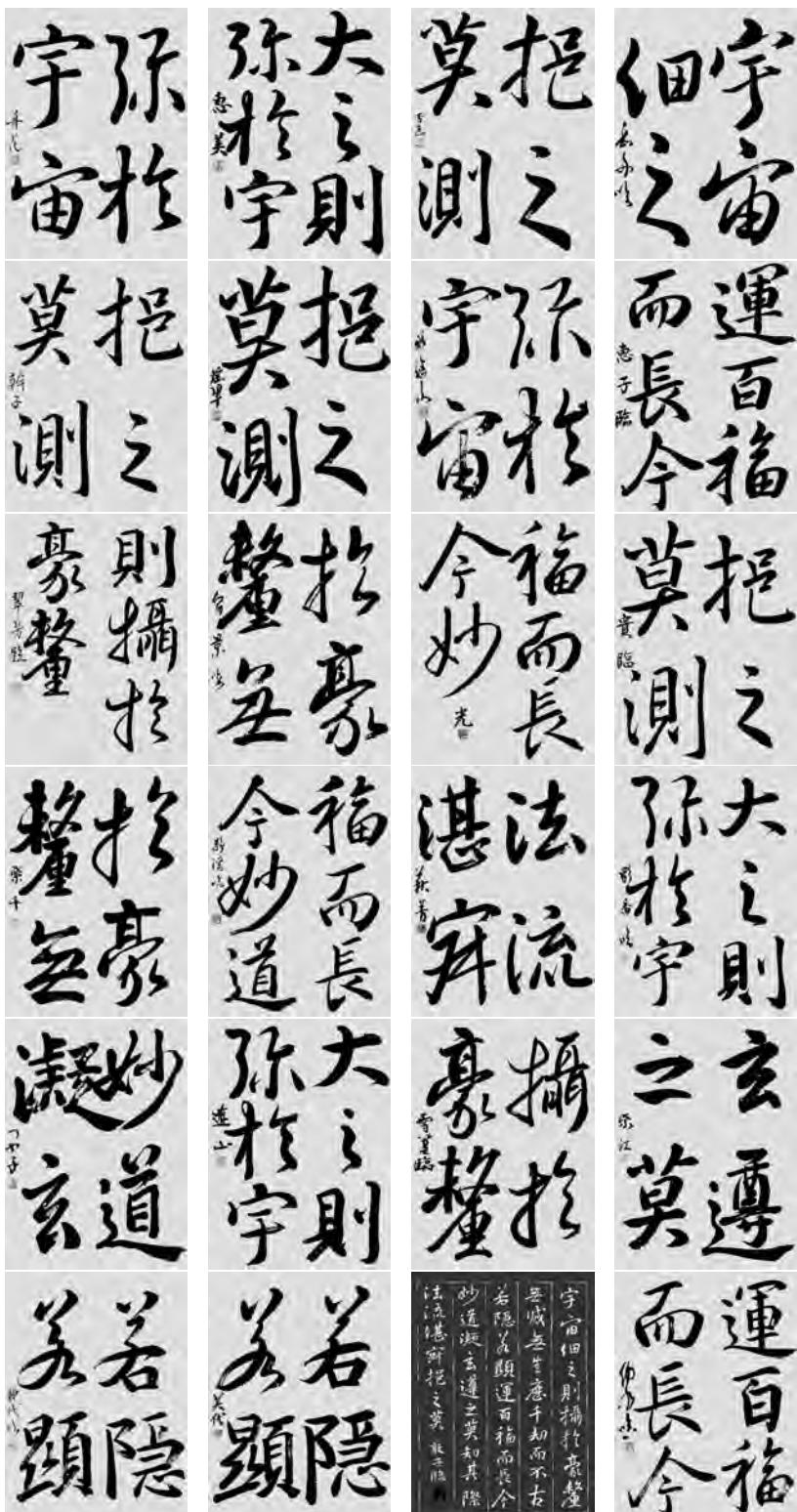
今月のホープ作品



加瀬 恵子

◎漢字研究部総評
古典に忠実で、先入観のない觀察が隅々に
まで行き届いた臨書態度に好感が持てる。字
粒・配置もほど良く、線にも艶と張りが感じ
られるのは見事。落款がやや重かったのと、
終筆部の筆離れが少し速かった点が惜しまれ
る。

漢字研究部 特選 加瀬 恵子
私たちなぜ臨書の学習を続けるのでしょ
うか。それが書道の基本練習だから? それ
はそうですが、最終的には「楽しいから」の
ような気がします。繰り返すうちに古典の素
晴らしさを次々に発見し、わずかずつでも自
分の理解が深まるのが楽しいのです。第一は
全体の雰囲気を感じ取ること、次に自分の臨
書と比較して細かい觀察力を鍛えること。こ
の繰り返しが臨書力の向上につながります。
お互いに素直な目を鍛えましょう。



静つ紫翠幹舟
や
代子千芳子花

み遊 静智瑠 惠
よ
こ山溪景翠美

敦雪萩光雅杏
貴 実 子
水江香子舟
子篁芳子悠邑

宇宿細之則攝於豪整
是減無生意千却而不古
若隱若顯運百福而長今
妙造無邊玄運知其際
法流總齊指之莫難曉

かな研究部
(関戸本古今和歌集)

選評 勝山初美

今月のホープ作品



高橋雅泉

かな研究部 特選 高橋 雅泉

粘りと抑揚の変化に富んだ線質は見事です。右回転のゆったりとした連绵線の特徴が良く表現されています。観察力の優れた美しい作品となりました。

◎かな研究部総評

全体的によく勉強された作品が多かった。関戸本の特徴である抑揚と太細、大らかな運筆に欠ける作品もありました。一本調子にならぬよう、より細かく研究を！

かな研究部成績表

和雅
朗子裕

嘉純千
江風峰

香良幹
舟泉生

愛佑和
石子子

秀作
(50音順)

青A や蘭上卯A 長玉大た澄高一上清奥玉紅颯う石京清竜
蓮I ま鼎泉月I 月松雲か春井宮泉月田松瑠葵る習橋月泉
沼堀田川中高伊平青黒浜字櫻鶴早小小長須後飯松吉境高
田江玉崎尾橋藤山木柳野田田部林林谷田藤高丸田野橋
奎幸哲優惠佳寿だ葵竹永春和雅 嘉純千香良幹愛佑和雅
心泉子子子子子子郷菜莖華子裕朗江風峰舟泉生石子子泉

横山大八森茂真松増堀別平春春原中樋千田武新庄佐櫻櫻驚坂坂込草木加
山本和木庭浦田別府山山岡村泉葉中山行司藤田田山本巻山刈村大加
由橋夕内明自
久真紀直鉢ケユ佳幸信彩勝春音雪陽花瑞咏雲歌智美麗順真日竹子
紀江子母子水ミ江子靈子華子琴江子衣舞華坤子自舟柏華祐紳華子